

かくも美しき生涯

— 井上究一郎先生を偲ぶ —

戸田吉信

いま私の机の上に、在りし日の先生の像がある。2月17日付けの朝日新聞夕刊（東京版）、「惜別」欄に掲載された写真のオリジナルである。二年前に、令嬢の金沢公子さんが撮られたものとか、四十九日の法要の後、奥様から送っていただいた。ご自宅で花に囲まれ、ゆっくりとくつろいでおられる姿、まるで一幅の絵を見るようだ。先生の写真の中で、私はこれがもっとも好きである。表情に満えられた安らぎ、そして神のごとき温容、人はいかにしてこのような境地に至るのであろうか。

本年1月24日の夕刻と夜、友人私市保彦君と金沢さんから相次いで電話がはいった。前日の23日、先生ご逝去という知らせである。いつかこの日が訪れるであろうことは覚悟していたし、漠然と予感めいたものがなかったと言えは嘘になる。だが一瞬、目の前が暗くなり、私は言葉を失った。

奥様ともどもお日にかかった一昨年の秋が、先生との最後になった。私市君と二人で、ほんのささやかな米寿のお祝いをさせていただいた、その少し後である。成城のイタリアン・レストラン、足が弱くなってとおっしゃっていた以外に、いささかもご高齢を感じることはなかった。お酒もほどほどに嗜まれ、いつものように四方山の話題に興じられた。お話の中心は、このとき手がけておられた訳詩の詩人たち、小林（秀雄）ランボー、中島（健蔵）ボードレル、三好（達治）ヴェルレーヌ、同期三編の卒業論文によって、日本のフランス象徴詩研究は黎明を迎えたにせよ、その後不当に「影の薄くなってしまった」（『水無瀬川』）ヴェルレーヌの重要性（今夏刊行された、美しい遺稿訳詩集『シテールへの旅』では、ヴェルレーヌの訳詩にもっとも多くのページがさかれている）、新刊の幾つかのプレイアド版、そして東大ご退官後に迎えられた武蔵大学の近況などだった。帰途、お宅までご一緒させていただき、何枚かのカメラにおさまった。

成城の駅周辺もすっかり変わった。駅前から小田急線と直角に、真っ直伸びる一本道、かつては暗くて、遠く感じられた道にも明るく照明が輝き、コンビニエンスに集まる若者たち、駐車場も完備されている。

昭和29年の春、私はすでに暗くなったこの道を、とぼとぼと歩いていた。本郷に進学して間もない頃である。駅から少し離れると、人影も少なく、あたりは静寂に包まれて、両側に黒々と聳える宏壮な邸宅が私を圧倒した。一本道はどこまでも続き、木々の闇は私を呑み込むように思えた。私の歩みは遅々としていた。ふだんは気にもかけなかった埃まみれの靴と、テカテカ光る学生服が惨めだった。

1月27日、お通夜。成城学園駅から、すっかり暗くなった道を世田谷の名利

耕雲寺に向かう。先生のお宅とは反対方向に道を取りながら、なぜか初めてお宅にうかがった夜のことが思い出された。あのときは道を間違えてしまい、息せききってたどり着いたとき、指示された時刻より 30 分近く遅くなっていた。そしてこの夜も、駅前の交番で聞いた道の一つ手前で右折したらしく、まるで迷路に入ったように、迷いに迷っているのだ。

成城のお宅には、あれから何度うかがったことだろう。私が広島出身で、先生が広島時代に親しくされていた広島文理大の助手（東洋史専攻）が、すでに故人となった私の叔父であることが判明すると、先生は「なんとという奇遇」と驚かれた。叔父が住んでいた広島牛田という界隈は、いまでこそ住宅がびっしりと建て込んでいるが、戦前は、その名が示すとおり、一面に田んぼが縹渺と広がる、のどかな田園の風景だった。広島駅からそれほど遠くはない。まだ小学校に入る前、駅前から木炭バスに揺られてその牛田に遊びに行ったことが、記憶にかすかな残像をとどめている。

その広島が一発の原爆で跡方もなく壊滅し、瓦礫の廢墟と化したとき、先生は日本語教師を志願されて、当時のいわゆる仏印、ハノイに在住しておられた。結果論だが、このことが幸いしたと言うべきであろう。戦後、家も家族もないものと覚悟を決めて帰還されたとき、ご家族は奥様の実家（瀬戸内海に面した静かな町である）に疎開されていて無事だったという話を読んだことがある。たしか鈴木信太郎先生の一文だった。

先生ご自身は、この種の話はほとんどされなかった。時おり、さも懐かしそうに語られたのは、広島街の思い出である。文理大の近くの「鷹の橋」という商店街の入口にあった「房州」は、当時としてはしゃれたフランス風の喫茶店だった（いまも現存する）。そして「虎屋」の饅頭、江波山から見降ろす、暮れなぞむ瀬戸の海、光の綾、緑の島々。

先生は昭和 8 年から、広島文理科大学および高等師範においてフランス語教師として教鞭を取られ、昭和 24 年、東京大学に助教授として戻られるまで在任された。

名だたる軍都、広島である。文理大でも高等師範でも、おそらく同盟国の言語であるドイツ語の重要性だけが声高に叫ばれ、一色に染まっていたにちがいない。威猛高に町を闊歩する軍靴の響きに背を向けて、先生はひたすらフランスの詩人たちとブルーストの世界に、沈潜されたのであろう。広島大学の学内外で、先生にフランス語とフランス文学の手ほどきを受けたという方々に、何人かお会いした（何代か前の学長もその一人である）。それらの方々はきまって、先生によって開かれたフランス文学の世界を懐かしみ、まるで青春の日の宝のように胸中にしまい込んでおられるのだった。

私事を語るのをお許しいただきたい。先生にご報告しようと思いつきながら、つい機会を逸してしまったことである。ここ数年、家内がバラの栽培に凝って、日本バラ会の広島支部に入会しているのだが、一昨年、誘われてドイツのバラ会との交流ツアーに単独で参加した。そのおり、現地でもたまたま、世界バラ会の公認審査委員で、日本バラ会京都支部会長の亀山寧氏という方と知り合った。言葉を交

わしているうちに、なんとこの方は、広島文理大で井上先生に教えを受けた、最後のクラスの一人だとわかったのである。しかも亀山氏はかつてイリエにプールの家を訪ねたとき、そこで先生にばったり会われたとか。何十年ぶりの出会いだったのだろうか。それにしても「偶然は、なんとという魔術師であろう」（『水無瀬川』）。ちなみに亀山氏は、京都の高校で長らく国語教師を勤められた後、現在は茶房経営のかたわらバラ一筋、悠々自適の生活を送っておられるよし。家内は昨年京都に氏を訪ねたが、私もぜひ一度お目にかかって、先生の思い出を心ゆくまで語り合ってみたいと思う。

通夜の後、軽い夜食の接待を受け、その席で金沢さんの挨拶から、私たちは先生のご病氣と死について正確に知るところとなった。語弊があるのを恐れず言えば、これほどまでに美しいと言うか、完璧な死、地上における天職をまっとうした後、静かに天に召されるような死というものが存在するのか、私は胸が熱くなる思いだった。それはフィリップ・アリエスがその浩瀚な書物、『死を前にした人間』で語っている、もはや現代人からは奪われた、昔日の人々の穏やかな死ではないだろうか。

昨年の夏に少し体調を崩され、9月に手術を受けられた。食道ガンであった。いったん退院されたが、12月に再度入院。だが食べ物が咽喉を通らないことを除けば、苦痛はほとんどなく、意識も最後まで明晰を保たれていたという。そして「ゲルマント家のほう」で語られる死に関する省察を、読んでおられたとのことである。こういう言い方が許されるなら、それは先生の生涯を完結するにふさわしい死だったように思えてならない。

1月28日午前11時、告別式。今度は迷わなかった。東京の真中に、このように奥床しいお寺があったのか。先生ご自身の、どう言ったらいいか、選択だったそうである。私市保彦氏の肅然とした司会。学会を代表して菅野昭正氏、プールの研究の最後の弟子として吉川一義氏の弔辞。菅野氏の格調、吉川氏の真情が胸をうつ。

何度目かにお宅にお邪魔したときのことだ。まだ学部時代だった。私の不遠慮な問いに、先生は静かな口調で答えられた。専門に勉強しているのは、プールのと現代文学、そして詩。「ロンサル以降の主な詩人たちのものは、大体読んでいます」と。この言葉の重みというか、それがどれほど大変なことなのか、学部学生にわかるはずもなかった。このとき、先生はたしか40代の半ば、50歳にはなっておられなかったと思う。辞書とてもコンサイスと昔の白水社の仏和辞典しかなかった頃だ。これも先生の徳をを受けて、「リトレ・エ・ボージャン、リトレ・エ・ボージャン」とお呪いのように唱えながら、1月半ほど古本屋めぐり、やっと高円寺の都丸書店で見つけたときの嬉しかったこと。

昭和29年4月、仏文科に進学した私たち40数名は、恐るおそる本郷の研究室に集合した。鈴木信太郎、渡辺一夫両教授、井上究一郎、小林正両助教授、そして福井芳男、二宮敬両助手。オリュンポスか高天原に足を踏み入れたようだった。神々は、学問とは何かなどという、利いたふうな、小賢しい議論は、一切なさらなかった。身をもって、日々講義の場で、私たちの前にご自分の学問を展開され

た。いまになってようやく、そのような場に身を置いたことが、熱い感動となって私の胸を震わせる。

促されて、同級の私市保彦、入沢康夫の両氏、それに吉川一義氏とともに、火葬場までお供して、最後の別れをさせていただいた。

本年 1 月 28 日付けの「ル・モンド」紙は、日本におけるフランス文学の「フランスヘンキリスト泰山北斗」として先生の死を大きく報じている。「失われた時を求めて」の個人訳を「記念碑的業績」と称え、またヴィクトル・ユゴー「レ・ミゼラブル」、ジャン＝ジャック・ルソー「告白録」その他のすぐれた訳者でもあったと紹介している。先生の鏤骨の訳業が、いかに飽くなき実証的精神によって支えられているか、いま私などが語るまでもないであろう。瑞々しい感性に包まれた華麗な世界、不思議な魅力を放ってやまない「ガリマールの家」、いや「忘れられたページ」から、「幾夜寝醒」「アルチュール・ランボーの「美しき存在」」「水無瀬川」等々に至るまで、先生が書かれる文章は、一見エッセーとも回顧とも紀行とも思える体裁を保ちながら、「正確な真実というもの」「存在の奥底にあるもの」「非常に複雑で」「非常に逃げやすく」「非常に到達しにくいもの」（「ガリマールの家」）を、あらゆる角度から、可能なかぎり追求してやまぬ学者的情熱に貫かれており、読者は襟を正しつつも快い精神の快樂に身を浸すことになるのだ。先生にとって美の探求の旅は、文字通り、同時に真実追求の道程でもあった。

考えてみれば、初めてお目にかかって以来、40 年以上にわたって、私はつねに、先生の影のもとに、書物を繙く生活が続けてきたのだった。職を得たのも先生のご推挙があったればこそである。初めて仕事らしい仕事をした後、成城のお宅で受けた講評と厳しいご批判は、まさに個人ゼミというにふさわしいものであった。時折りお送りした、つたない文章や未熟な訳文には必ず目を通してくださり、旬日を経ずして、美しい絵葉書や封書に批評と感想のお言葉が返ってきた。吉川氏の甲辞に、これからの仕事を誰に見せればよいという、痛切な叫びがあった。いま私は、これにむなしく笈を返すしかない。

私は、私たちは、これから先、先生の長い不在に堪えていかねばならない。

(平成 11 年 8 月)